

41874

教科書文庫

4
815
41-1925
2000022314

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

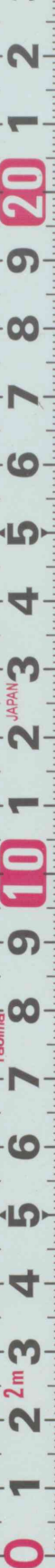
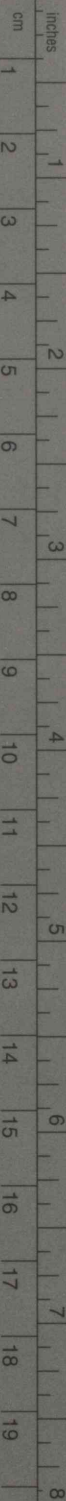


© Kodak, 2007 TM: Kodak

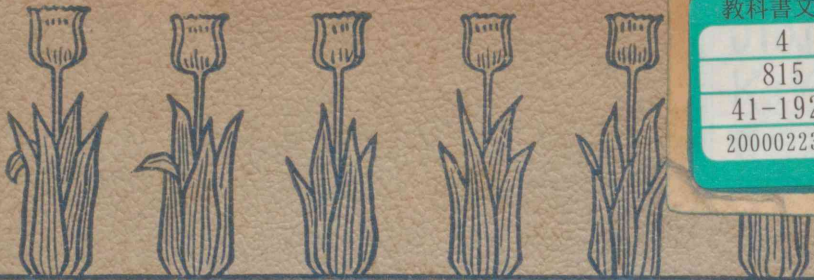
Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
815
41-1925
2000022314



日本文法教本



著 金澤庄三郎



東京開成館藏版



文部省檢定
大正十四年一月十四日
中學校師範學校國語科用

教科書文庫
4
815
41-1925
2000022314

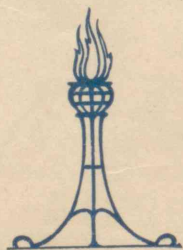
資料室

375.7
Ka14

日本文法教本



金澤三郎著

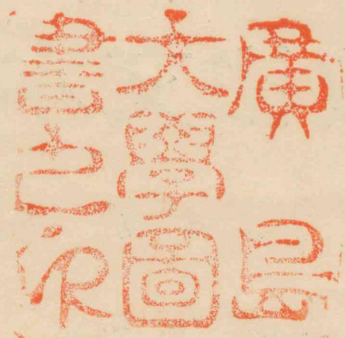


広島大学図書

2000022314



東京開成館藏版



日本文法教本 卷下

目次

第二編

第一章	動詞と助動詞との連続	一
第二章	助動詞相互の連続	一五
第三章	口語助動詞の連続	二〇
第四章	助詞の用法	二七
第一節	条件の助詞	二七
第二節	疑問・反語の助詞	三三
第三節	並列指示の助詞	三三
第四節	禁止・願望の助詞	三六

第五節 助詞の係結……………四〇

第五章 口語助詞の用法……………四二

第六章 單語の構成……………四四

第七章 品詞の轉成……………五〇

第三編

第一章 文の主要成分……………五五

第二章 文の主要成分の構成……………五六

第三章 修飾語及びその構成……………六四

第四章 文の主要成分の位置……………六九

第五章 文の主要成分の併置……………七三

第六章 文の主要成分の省略……………七五

第七章 節……………七九

第八章 文の構成上の分類……………八三

附録 文法上許容スベキ事項

附表 助動詞相互の連續表

目次終

青島大學圖書印

日本文法教本 卷下

第二編

第一章 動詞と助動詞との連続

馬術を教へしむ。

馬術を教へたり。

馬術を教ふべし。

馬術を教ふるなり。

右の例のやうに、助動詞が動詞に連るには、しむはその未然形を受けたりはその連用形を受け、べしはその終止形を受

指定の助動詞の連続

けなりはその連體形を受ける。このやうに、助動詞が動詞に連るには、それ〴〵一定の法則がある。指定の助動詞の連続 指定の助動詞なりが動詞に連るには、その連體形を受ける

山の端のあかきは月の上るなり。學校にて試験を受くるなり。

○なりはまた形容詞の連體形に連る。

わが軍の強きにあらず敵の弱きなり。

○なりは名詞及び代名詞にも連る。

富士山は天下の名山なり。

余の心を知れるは君なり。

○指定の助動詞たりは専ら名詞及び代名詞に連る。

打消の助動詞の連続

打消の助動詞の連続 打消の助動詞ずざりじが動詞に連るには、その未然形を受ける。

雨に煙りて山も見えず、湖も見えず。

はからざりき、今、君に別れんとは。

式は未だ始まらじ。

打消の助動詞まじが動詞に連るには、その終止形を受ける。

友は未だ都へは着くまじ。

○まじがラ行變格活用の動詞に連る時にかぎり、その連體形を受ける。

憂ふるほどのことはあるまじ。

○右の例のやうに、ずざりは普通の打消に用ひられ、まじは多くは推

推量の助動詞の連続

量して打消す意味に用ひられる。

推量の助動詞の連続 推量の助動詞らんらしめりべし。ばかりが動詞に連るには、その終止形を受ける。

静心なく花の散るらん。

み吉野の山の白雪積るらし。

母校の櫻も今咲くめり。

休暇もやがて終るべし。

林檎も程なく熟すべかり。

推量の助動詞けんが動詞に連るには、その連用形を受ける。

谷間の鶯も巢を出でけん。

古の人の遊びけん吉野の川原。

○推量の助動詞ましは、現代文には用ひられないが、動詞に連るには、そ

休、但、
的、ら、
は、
は、
は、

時の助動詞の連続

の未然形を受ける。

春の心はのどけからまし。

時の助動詞の連続 時の助動詞きけりつぬたりが動詞に連るには、その連用形を受ける。

われは先年この書を読みき。

われは嘗てこの書を読みけり。

只今この書を読み終へつ。

頗る愉快に読みぬ。

われはその書の半ばを読みたり。

○きがカ行變格活用ナ行變格活用に連るには、異例がある。

一、カ行變格活用の動詞には、し(連體形)しか(已然形)だけが、その未然形連用形を受け、ぎ(終止形)はこれを受けない。

二、サ行變格活用の動詞には、ししかはその未然形を受け、きはその連用形を受ける。

活用の種類	動詞	未然形	助動詞	連用形	助動詞
力行變格活用	く	(來)	き	き	き
サ行變格活用	す	(爲)	しか	しか	しか

時の助動詞りは四段活用・サ行變格活用の動詞に限って連り、四段活用では已然形、サ行變格活用では未然形を受ける。空高く白雲靜かに動けり。終日樂しく運動せり。

○次の例のやうに、りを下二段活用に連ねるのは誤である。海山百里を隔てり。多年の教訓を受けり。

尾谷三傳右ニテ
平家家討滅
ヲ企テリ
こけり

漏れ来る味乃言を
我九聞ケリ

樂言面白く
病聞エリ

る危弱死セトスル
子ヲ助ケケリ

使役の助動詞の連続

時の助動詞んは用言の未然形を受ける。霏々として降る春雨將に霽れんとす。勇往邁進、敵軍の生還者なからんことを期せり。使役の助動詞の連続 使役の助動詞すさすしむが動詞に連るには、その未然形を受ける。すは四段活用・ナ行變格活用・ラ行變格活用の未然形を受ける。

口語詩を學ばす。(四段) 醫術の誤のため、遂に彼を死なす。(ナ變) 弟をかゝる家に居らするは不可なり。(ラ變) さすは右の三種以外の動詞の未然形を受ける。弟に文字を教へさす。(下二段)

受身の助動詞
の連続

幼年時代より洋服を着させたり。(上一段)
しむはすべての動詞の未然形を受ける。

偉人傳を讀ましむ。(四段)

雨天にはオーバーシウスを用ひしむ。(上二段)

頼朝使を遣して義經を責めしめたり。(下二段)

雨天の際は外套を着しむ。(上一段)

外套なきものは室内に居らしむ。(ラ變)

受身の助動詞の連続 受身の助動詞るらるが動詞に連るには、その未然形を受ける。
るは四段活用ナ行變格活用ラ行變格活用だけの未然形を受ける。

韓信勝をくゞりて笑はる。(四段)

一人子に死なる。(ナ變)

あられもなきことなり。(ラ變)

らるは右の三種以外の動詞の未然形を受ける。

貞任縛につきて、罪を責めらる。(下二段)

道真重く用ひらる。(上二段)

道真終に纒せらる。(サ變)

○らるがサ行變格活用の動詞に連るには、その未然形を受けて、

批評せらる。代表せらる。保護せらる。

などとなるべきのを、

批評さる。代表さる。保護さる。

などといふことがある。

可能の助動詞の連続 可能の助動詞るらるが動詞に連る

可能の助動詞
の連続

には、受身の助動詞るらると同じ法則による。

たやすく讀まる。

二三人は居らる。

近くにて求めらる。

今日は起きらる。

面白く見らる。

可能の助動詞べしべかりが動詞に連るには、推量の助動詞べしべかりと同じ法則による。

三尺の秋水鐵をも斷つべし。

敵の勢あたるべからず。

尊敬の助動詞の連続 尊敬の助動詞るらるすさすしむが動詞に連るには、可能の助動詞るらるまたは使役の助動詞

尊敬の助動詞の連続

すさすしむと同じ法則による。

父上東京へ行かる。

先生は國語を教へらる。

殿下先頭に立たせ給ふ。

宮は吉野へ落ちさせ給ふ。

位に即かきしめ給ふ。

希望の助動詞の連続 希望の助動詞まほしたしたかりが動詞に連るには、まほしはその未然形を受け、たしたかりはその連用形を受ける。

君が歌こそ聞かまほしけれ。

運動會には大いに奮闘したし。

我も一等を取りたかりき。

希望の助動詞の連続

命令の助動詞の連続

命令の助動詞の連続 命令の助動詞べし^レが動詞に連るには、その終止形を受ける。

明朝五時までに來べし。

○ラ行變格活用の動詞には「有るべし」のやうに、その連體形を受ける。

詠歎の助動詞の連続

詠歎の助動詞の連続 詠歎の助動詞なり^レが動詞に連るには、その終止形を受ける。

社の梅も匂ふなり。

千鳥鳴くなり、御津の濱邊に。

比況の助動詞の連続

比況の助動詞の連続 比況の助動詞ごとし^レが動詞に連るには、その連體形を受ける。

動詞と助動詞との連続表

その風景まのあたりに見るごとし。
満山の紅葉錦を織ることし。

動詞と助動詞との連続表
動詞と助動詞との連続を表で示すと、次のやうになる。

動詞	助動詞	動詞	助動詞	動詞	助動詞	動詞	助動詞
未然形	未然形に連るもの	連用形	連用形に連るもの	終止形	終止形に連るもの	連體形	連體形に連るもの
行く	ずじ ^レ り(打消)	けん	けん ^レ けん(推量)	ら	ら ^レ ん(推量)	なり	なり ^レ ん(指定)
まほし ^レ 希望	まほし ^レ 希望	けり	けり ^レ けん(推量)	し	し ^レ ん(推量)	ごとし ^レ 比況	ごとし ^レ 比況
まし ^レ 時	まし ^レ 時	つね	つね ^レ けん(推量)	かり	かり ^レ ん(推量)		
ん ^レ 時	ん ^レ 時	ぬ	ぬ ^レ けん(推量)	かり	かり ^レ ん(推量)		
さす ^レ 使役	さす ^レ 使役	たり	たり ^レ けん(推量)	じ	じ ^レ ん(打消)		
しむ ^レ 尊敬	しむ ^レ 尊敬						
着							

責めらる	送らる
（尊敬）	（受身）
〃	〃
たし（希望）	〃
〃	べし（命令）
なり（詠歎）	

○この表は助動詞が普通に動詞に連る活用形を標準として作つたものであるから、その連続の法則に異例のあるものは、特に。符を附けて置く。

練習

- 次の文に誤があれば理由を述べて訂正せよ。
- 一、明日は空晴るゝまじ。
 - 二、全章を讀ましたる後に、これを講じさす。
 - 三、村民喜びて先生を迎へり。
 - 四、傳騎急に馬を走らさす。

此所に貼紙す①、おろす。
 異議なく先方にて引さ
 受け②マ
 此所に屋敷弁を捨つ③
 べからず。
 此の川にわらを投入
 する事を禁ず。
 此の竹相に及古杖
 を入るゝ事を禁ず。

- 五、この品に手を觸るゝべからず。
- 六、無用のことには關係せまじきものなり。
- 七、これわれらが自己を顧みべき好機なり。
- 八、萬事を彼に任ししに、よくわが信頼に報えり。
- 九、彼は國のために命を捨てり。
- 一〇、使をやりて菊の二三枝を取り寄さす。

第二章 助動詞相互の連続

助動詞は數箇を併せ用ひて、種々の複雑な意味を表すことが出来る。これを助動詞相互の連続といふ。助動詞相互の連続には、各定まつた法則がある。例へば、
 行くゝしむゝらるゝべしゝなり
 の一つの動詞と四つの助動詞とを、この順序に連ねるには、

上の語は下の語に連るために、いづれもそれに適應する活用形をとつて、

行か	未然形	終止形	連體形
	しめ	らる	べき
			なり。
	(未然形に連る助動詞)	(終止形に連る助動詞)	(連體形に連る助動詞)

となるのはそれである。

このやうに、助動詞が相互に連續するには、動詞の未然形を受け、そのものは、助動詞でもその未然形を受け、連用形・終止形・連體形に於ても、すべて動詞に連る場合と同じ法則による。

○らんべしべかりめりらしまじのやうに、ラ行變格活用の動詞に限つてその連體形を受けるものは、活用がラ行變格活用に等しい助動詞に於ても、またその連體形を受ける。

練習

一、次の文の―の所に適當な助動詞を入れよ。

イ、弟にこの盛典を見―たし。

ロ、決して御心配下さ―まじく候。

ハ、この晝は友人が晝き―た。

ニ、明日出發するゆゑ、今日中に準備す―べし。

ホ、敵をして一步も進ま―べからず。

ヘ、木々の梢はもみぢし―らん。

ト、目前の小利に惑は―まじ。

チ、少年をして獨立自尊の風を養は―べし。

リ、宿痾癒えて、多年の憂苦消え失せ―ぬ。

又、笑は―ざりき。

二、次の文の中の助動詞を指示し、その種類連続について説明せよ。

イ、慈愛なる母の懐に養はれたる子は、生涯その恩愛を忘れず。日本の

風土は國民の慈母なり。地味豊饒にして、河海に魚貝の利多く、生活

をして自由ならしむるが上に優美穩和なる山川は常に險上に愛を

湛ふるが如し。接するものはこれに親しみ、親しむものはこれを慕

ふ。愛に迎へらるゝものは愛を酬いざるを得ず。天然の大公園に

住むわが國民が、その一木一草をもなつかしむは自然の情なるべし。

ロ、はるけき旅の空おもひやるにも、いさゝかも心にさはらんもむづか

しければ、日頃住みける庵を相知れる人にゆづりて出でぬ。

ハ、不破の關屋は荒れはてて、なほ漏るものは秋の雨、いつかわが身のを

はりなる、熱田の八劍伏し拜み、末はいづくことほたふみ。

ニ、おなじことまた今さらにいはじとにもあらず。おぼしきこといは

下心 西

ぬは腹ふくるゝわざなれば筆にまかせつゝ、あぢきなきすすびにて、
かいやりすつべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

ホ、與一目をふさいで、南無八幡大菩薩、別してはわが國の神明日光權現

宇都宮那須温泉大明神、願はくはあの扇の真中射させてたばせ給へ。

これを射損ずるものならば、弓切り自害して、人に再び面を向ふべか

らず。今一度本國へ歸さんと思し召さば、この矢はづさせ給ふなと、

心の中に祈念して、目を見開きたれば、風も少し吹き弱つて、扇も射よ

げにこゑなりたりけれ。

へ、與一鏑を取つて番ひ能つ引いてひやうと放つ。小兵といふ條、十二

束三伏弓はつよし、鏑は浦響くほどに長鳴して、過たず扇の要ぎは一

寸ばかり置いて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海に入りければ、扇

は空にぞあがりける。春風に一もみ二もみ揉まれて、海へさつとぞ

散つたりける。皆紅の扇の夕日に輝いて白波の上に漂ひ、浮きぬ沈

けるは連用形より
みぬゆられけるを沖には平家骸を叩きて感じたり。陸には源氏骸
を叩いてどよめきけり。

指定の助動詞
の連続

第三章 口語助動詞の連続

指定の助動詞の連続

なら || 直接、または助詞のを隔てて、動詞の連體形を受け
る。

山へ行く(の)なら、僕も行かう。

打消の助動詞の連続

ん(ぬ)
ない
なから
|| 動詞の未然形を受ける。

打消の助動詞
の連続

よう、静
山へ行く
たす、志、行、動、動、進、行
(推量形)

推量の助動詞
の連続

推量の助動詞の連続

まい || 四段活用の動詞では終止形を受け、その他の動詞
では未然形を受ける。
何のことだか、さつぱり分らん(ぬ)
そんな話は少しも聞かない。
音楽會には行かなかつた。
今になつては、もう何も言ふまい。
見まい、聞くまい、話すまい。
う || 四段活用の動詞の未然形を受ける。
よう || その他の動詞の未然形を受ける。
らしい || 凡べての動詞の終止形を受ける。
どんなに嬉しいことであらう。

時の助動詞の連続

時の助動詞の連続

船はもう神戸に着いてゐよう。
雨が降つてゐるらしい。

うよう || 推量の助動詞うようと同じ法則による。

ただ || 凡べての動詞の連用形を受ける。

夏休には海に行かう。

來學期から受験準備を始めよう。

入學試験を受けた。

住ん(み)だ。 飛ん(び)だ。 漕い(ぎ)だ。

使役の助動詞の連続

使役の助動詞の連続

せる || 四段活用の動詞の未然形を受ける。

させる || その他の動詞の未然形を受ける。

受身の

助動詞の連続

受身の助動詞の連続

短歌を作らせる。
木を植ゑさせる。

れる || 四段活用の動詞の未然形を受ける。

られる || その他の動詞の未然形を受ける。

書かれるだけ書いて見よう。

この桃はもう食べられる。

可能の助動詞の連続

可能の助動詞の連続

れる || 受身の助動詞れるられると同じ法則による。
られる

○可能のれるが四段活用の動詞について書かれる歩かれる乗られる
などとなる時には、大抵下一段活用の動詞に變つて書ける歩ける乗

尊敬の助動詞
の連続

尊敬の助動詞の連続

れるなどとなる。

れる
られる
受身の助動詞れるられると同じ法則による。

ます 凡べての動詞の連用形を受ける。

勅語を讀まれる方が校長先生です。

先生は熱心に教へられる。

質問がありましたら、お答へします。

希望の助動詞の連続

希望の助動詞
の連続

たい
たから 凡べての動詞の連用形を受ける。

僕も一緒に行きたい。

比況の助動詞
の連続

比況の助動詞の連続

あれを寫眞にとりたかつた。

やうだ

やうな

やうです

凡べての動詞の連體形を受ける。

まるで繪を見るやうだ(やうです)

夢を見てゐるやうな心持だ。

練習

次の文から助動詞を選び出して、その種類及び動詞との連続について説明せよ。

一、それはよいところに氣がつかまりました。私も實は我が國の古代精神を

時、
然、
形、
形、
指、
指、
指、
指、

知りた^いといふ希望から、古事記を研究しようとしたが、どうも古い言葉が分らないと、十分なことは出来ない。古い言葉を調べると、一番よいのは萬葉集です。そこで、まづ萬葉集の研究を始めたのでした。

二、私は自分の氣に入つた仕事を発見した。今の所、この點に於ては、私は世界中で一番幸福な一人だと思つてゐる。私の友達が來て、自分のしてゐる仕事は自分の本性にそぐはないといふやうな嗟嘆を洩すのを聞くと、その人はさぞ苦しんだらうと思ふ。日々の生命、それは二度と嫌らなく見えるに違ない生活のために、磨り減らして行きつゝあると、さう痛感せねばならぬ。その人の心を思ふと、全く悲しいことだ。そして、私は自分があまりに自分の仕事に満足してゐるのを濟まないとさへ思ふ。

三、君が園は花の盛りなり。と、イギリスの詩人はそのソネットの一つに歌つた。私達はこの花の盛りをあらゆるものの生命と見たい。私達が住む世界の何處かに、今、花の盛りだといへるやうなものがほしい。

第四章 助詞の用法

第一節 條件の助詞

助詞は、ともども、がには條件を表す意に用ひられる。條件の助詞には、或條件の下に起るべき事實がその條件と一致することを表す順の條件の助詞と、この兩者の一致しないことを表す逆の條件の助詞とがある。

順の條件の助詞

順の條件の助詞

ばは假定の条件を表す時には用言の未然形を受け、確定の条件を表す時には用言の已然形を受ける。

一、雨降らば、花も散らん。

風涼しくば、庭に出でん。

二、雨降れば、花も散りそめたり。

風涼しければ、庭に出でたり。

逆の条件の助詞

逆の条件の助詞

ともは假定の条件を表し、動詞助動詞の終止形を受け、形容詞の未然形を受ける。

どどもは確定の条件を表し、用言の已然形を受ける。がをには確定の条件を表し、用言の連體形を受ける。

一、春逝くとも、我は歎かじ。

年老いたりとも、氣力衰へざるべし。

命は短くとも、名は朽ちざらん。

二、春逝けどども、花は散らず。

年老いたれども、氣力衰へず。

命は短けれども、名は朽ちず。

三、春は逝きしが、業は成らず。

年老いたるを、氣力のみは衰へず。

命は短きに、名は永へに朽ちず。

○ともともと同じやうに逆の条件を表すが、現代文には用ひない。

○ともは動詞助動詞の連體形を受けることもある。(文法上許容すべき事項第十一参照)

○もはともどもの代りに用ひられることもある。(同上第十五参照)

三、春逝くとも

M. Sango

練習

次の文に誤があれば、理由を述べて訂正せよ。

- 一、若し明日雨天に候へば、運動會は順延致すべく候。
- 二、今の中に勉強せざれば、老いて後に悔ゆれども及ばざらん。
- 三、都合あしとも、約束をば違へず。
- 四、人に勝らんと思へば、須らく奮發すべし。
- 五、日は暮るゝとも、會は終へざるべし。
- 六、規則をよく心得るべし。
- 七、山高もとも、登るに道あり。
- 八、余の出したる手紙を見れば、直ちに來るべし。
- 九、刀折れ矢盡くるとも、いかで屈すべき。
- 一〇、腐敗したるものを食べば、必ず胃腸を害すべし。

疑問の助詞

疑問の助詞

第二節 疑問・反語の助詞

助詞や、かは疑問の意を表すのに用ひられ、やは用言の終止形を受け、かはその連體形を受ける。

東京に行きたることありや、なしや。

富士山を眺め得たりや。

東京に行きたることあるかな、なきか。

富士山を眺め得たるか。

○やは用言の連體形を受けることがある。

その書には繪あるや。

その書はおもしろきや。(文法上許容スベキ事項第十、第十四参照)

や、かは用言の前に置かれることがある。その場合には、下

反語の助詞

を用言の連體形で結ぶ。

春や疾き、花や遅き。

誰をか友とすべき。

反語の助詞

や・かは疑問の意から轉じて、反語として斷定する意を表すのに用ひられる。

助詞やは、かは、や・かに感動詞はの添はつたもので、や・かよりも一層強い反語の意を表す。

や・か・やは、かはの用法は、疑問の助詞や・かと同じである。

勉めずやあらん。

何をか悲しむべき。

勵まずやはあるべき。

一寸の光陰なりとも輕んずべきかは。

練習

次の文に誤があれば理由を述べて訂正せよ。

一、人喜ぶべきや。

二、いかなる書を讀めりや。

三、山に登るべきや、海に行くべくや。

四、何をや日本の特長といふ。

五、善きや悪しきや。有るや有らぬや。

第三節 並列指示の助詞

並列の助詞

並列の助詞

助詞とは並列の意を表すのに用ひられる。その場合には、各語句ごとに、體言は直接に、用言はその連體形を受ける。

宮島と橋立と松島とは、日本の三景なり。

海に行くのと山に登るとが樂みなり。

花の美しきと紅葉の映えたと、いづれか勝れる。

○並列のとが用言の連體形を受けるのは、その間に體言が略されたのである。

海に行く(事)と、山に登る(事)とが樂みなり。

○並列のとの中、最終のものはこれを省略することがある。

宮島と橋立と松島(と)は日本の三景なり。

海に行く(と)山に登る(と)が樂みなり

たゞし、

土曜と日曜の朝に書を読む。

といふやうな場合には、

「土曜と日曜との朝」「土曜と日曜の朝と」

この二つのいづれか明かでない。このやうに、二様に解されるものはこれを略さない。(文法上許容スベキ事項第十三参照)

指示の助詞

指示の助詞

助詞とはまた上の語句の意味を指示するのに用ひられる。

この場合には、體言は直接に、用言はその終止形を受ける。

鹿を馬といふ。

友試験を受くといふ。

今年を受験者多しと聞く。

幸に合格したりと告げ來れり。

と——終止形(本則)

許容(連體形)

右のやうに、指示の助詞とは終止形を受けるのが本則であるが、この外、命令の文では命令形を受け、疑問・反語の助詞が上にある時、または、體言と同じやうに用ひられる語句に連る時には、連體形を受けるなど、すべて言ひ切る語の下につく。

眞面目に勉強せよと諭す。

何をか憂ふると問ふ。

何事か成らざるべきと勵ます。

月出づると見えたり。(文法上許容スベキ事項第十二参照)

助詞に「へ」まで「より」は時・處または目的・理由などを指示するの用に用ひられ、體言または用言の連體形を受ける。

海に行き、山に登る。

上へ上へと登る。

右のやうに「に」は歸着する點を指示し、「へ」は進行する目標を指示する。

花の咲くまで待ち給へ。

花散りしより月餘となりぬ。

右のやうに「まで」は歸結を指示し、「より」は起點を指示する。よりは「散りてより」「行きてより」などのやうに「上」に助詞「て」を受けることが多い。

助詞のみ「ばかり」は意味を限定して指示する意に用ひられる。その連続は「に」「へ」まで「より」と同じ法則による。

一心に勉強するばかり樂しきはなし。

見ゆるは花の咲きたるのみなり。

右の外、だにさへすらなども指示の助詞である。

禁止の助詞

禁止の助詞

第四節 禁止・願望の助詞

助詞なは動作を禁止する意を表し、動詞の終止形及び受身使役等の助動詞の終止形を受ける。たゞし、ラ行變格活用の動詞ではその連體形を受ける。

おのが務を怠るな。

近寄りて怪我させらるな。

危き處へ近寄らすな。

御油斷あるな。

なはまた中間に動詞の連用形を挿んでそこに續き、禁止の意

を表す。たゞし、カ行變格活用サ行變格活用の動詞に限りその未然形を挿む。

おのが務をな怠りそ。

吹く風をなこそその關と思ふ。

愚かなるわざをなせそ。

○な……そこに助動詞の添はつた動詞を挿む場合にも、右の用法と同じである。

近寄りてな怪我させられそ。

危き所へな近寄らせそ。

願望の助詞

願望の助詞

助詞なんばやがながもは願望の意を表し、なんばやは用言の未然形を受け、がながもは助詞もを受ける。

願望(未然)
なんば(連用)
強(用言)

故郷を忍ぶ思を歌はなん。
われらが歌を心ある人に聞かせなん。
都の春のたより聞かばや。
老いず死なずの薬もがな。

第五節 助詞の係結

疑問の助詞や、かを用言の連體形で結んだもの、または禁止の助詞なを、そで結んだものなどのやうに、係と結とに一定の關係のある用法を特に助詞の係結といふ。助詞ぞ、なんこそは、いづれも文の結に關係を及ぼし、その形式はきまつてゐる。即ち、ぞ、なんは用言の連體形で結び、こそはその已然形で結ぶのが本則である。

や
なん
こそ
連體
然

昔の人の袖の香ぞする。
花なん昔を語り顔なる。
我こそ行かめ。

練習

次の文に誤があれば、理由を述べて訂正せよ。

- 一、英語と國語の書取は完全に出來たり。
- 二、出品物に手を觸る。
- 三、君こそわが頼む人な。
- 四、危きことをな。
- 五、人の心ぞ美しはれ。
- 六、親の恩を忘る人な。

出品物に手は觸るぞ

君こそ我が愛する人
危き事こそ助けよ
人の心こそ美しけれ
君は親の恩は忘れずん

七月なん我を慰め顔な^り。
八、音樂會に招かれたるや^や。

The end

條件の助詞

條件の助詞

第五章 口語助詞の用法

ば || 用言の已然形を受けて、假定と確定を表す。

花が散れば、人は來ないだらう。

夏にならなければ、海へは行けない。

ても || 用言の連用形を受ける。

花が散つても、人は來るだらう。

行つても行かなくても同じことだ。

けれど
けれども

用言の終止形を受ける。

花は散つたけれど、夏はまだ遠い。

君は笑ふけれども、それは嘘でない。

右の外、口語には、條件の助詞として、がととのでのにからなどがある。

雨は降るが、風は吹かない。

風が吹くと、海が荒れる。

海が荒れるので、水泳はだめだ。

泳ぎ方も知らないのに、深い處へ行く。

油断をするから、そんなことになるのだ。

疑問の助詞

疑問の助詞

反語の助詞

か || 文の終を受ける。

向うに見えるのは學校か。

富士山を見たことがあるか。

空はよく晴れてゐたか。

○か || 用言の上にある時には、誰か居るだらう。「何か見よう」のやうに、疑や問の意はなくて、不定の意を表す。

反語の助詞

か || 疑問のかと同じ用法による。

誰がそんなことを言ふものか。

何でむつかしいことがあらうか。

第六章 單語の構成

疊語

疊語 同じ單語が重なつて出來た單語をいふ。

疊語の名詞

人々。山々。國々。町々。

疊語の代名詞

我々。たれ々。それ々。

疊語の動詞

絶え々。泣き々。恐る々。

疊語の形容詞

重々し。若々し。さか々し。

疊語の副詞

折々。時々。ゆめ々。なほ々。

疊語の感動詞

熟語

いざく。 あはれく。 おやく。 さあく。
熟語 二つ以上の異なる單語が結びついて出來た單語をいふ。

朝日。 賣物。 遠山。 朝寢。 賣買。 遠乗。 朝寒。

賣高。 遠淺。(名詞)

物語る。 近寄る。 討取る。(動詞)

名高し。 有難し。 重苦し。(形容詞)

是非とも。 恐らくは。 少しも。(副詞)

且又。 然らば。 しかのみならず。(接續詞)

接頭語

接頭語 獨立しないで、或語の上につき、これと結びついて熟語を作るものをいふ。

み雪。 さ夜。 ま菰。 を田。(名詞)

接尾語

接尾語 獨立しない語で、或る語の下につき、これと結びついて熟語を作るものをいふ。

友だち。 水夫ら。 神さま。 一番。(名詞)

我ら。 汝たち。 こちら。 どなたさま。(代名詞)

春めく。 氣色だつ。 汗ばむ。 上品ぶる。(動詞)

露けし。 學者らし。 古めかし。(形容詞)

心地よげ。 清らか。 花やか。 面白さう。(副詞)

○右の外、(一)接頭語と接尾語とのあるもの、(二)接尾語を重ねたものなど

がある。

- 一、御父上。お前たち 第一等
- 二、父上様。兄さんたち 一番目。

練習

一、次の文の中、疊語熟語及び接頭語接尾語のある品詞を示せ。

イ、秋らしくなりて、いと露けし。

ロ、さ夜ふけて、仄暗さみあかしの影ものさびし。

ハ、古の奈良の都の八重櫻、今日九重に匂ひぬるかな。

ニ、うれし船の旅。うかぶ鷗、たつ千鳥、あれ〜波間に、見よ〜岩間に。

山々浦々、沖漕ぐ釣舟、おながらに見つづぞ行く。

ホ、人げもない道を小一里も歩いた頃、真夜中のうすら寒い風は木々に

囁き、谷川の音は耳許近く聞え、あたりは愈々物凄くなつて来た

へ、忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、どこで鳴いて

ゐるか影も形も見えない。たゞ聲だけが明かに聞える。せつせと

忙しく絶間なく鳴いてゐる。

ト、「おい」と聲をかけたが、返事がない。軒下から奥を覗くと、煤けた障子

が立ててある。向ふ側は見えない。五六足の草鞋が淋しさうに庇

から吊されて、屈託氣にふらりと揺れる。

二、次の單語の成立について説明せよ。

心細し。十里。山櫻。朧月夜。ゆめ〜。御勉強。狭衣。小高し。

真暗。軽々し。いざや。弱蟲め。お母様。子供達。嬉し涙。山々。

大人ぶ。時めく。風景。細道。父母。兔狩。あばら屋。す面。うす

うす。遠ざかる。御一同様。薄黒さ。十年目。子供らしげ。寒がる。

轉成の名詞

第七章 品詞の轉成

品詞はその用法形式及び意義などの變化によつて、一の品詞から他の品詞に轉じることがある。これを品詞の轉成といふ。

轉成の名詞

一、動詞から轉成した名詞

月光る。——月の光。

懇切に教ふ。——懇切なる教。

○右のやうに、動詞はその連用形から名詞に轉成する。

○このやうな轉成の名詞は熟語にも多い。

書取 申込 取扱 月見 落葉 仕事

○助動詞の連用形も、その結びついた動詞とともに轉じて、熟語の名詞

となることがある。

四はれの身。世の見せしめ。

二、形容詞から轉成した名詞

海青し。——青の旗。

花赤し。——赤の組。

○右のやうに、形容詞はその語根から名詞に轉成する。

三、感動詞から轉成した名詞

物のあはれ。

轉成の代名詞

君に忠義を盡すべし。——君見給へ。

上の君は名詞であるが、下の君は代名詞である。このやうに、代名詞には名詞から轉成したものが少くない。私僕足

轉成の代名詞

轉成の副詞

下閣下拙者小生臣などは皆さうである。

轉成の副詞

一、名詞から轉成した副詞

運動會は本日舉行せらる。

兄は昨夜歸り來れり。

二、動詞から轉成した副詞

たとひ雨降るとも行かん。

三、形容詞から轉成した副詞

花美しく咲く。

軽く浮ぶ。

○このやうに、動詞・形容詞はその連用形から副詞に轉成する。

轉成の接續詞

轉成の接續詞

一、名詞から轉成した接續詞

秋冷の候に御座候處。

二、動詞から轉成した接續詞

宮島・松島及び天の橋立を日本の三景といふ。

三、副詞から轉成した接續詞

山また山。

練習

次の文の中、轉成の品詞を擧げ、且その由來を説明せよ。

一、まづ君より始めよ。

二、友は大いに喜び、明日逢はんと約せり。

三、始あらざるはなけれど、よく終あることなし。

- 四、今朝は雲霧なごりなく晴れて、海山はるく見渡さる。
- 五、明友は憂を分ち、樂を偕にすべし。
- 六、問ふは一時の恥、知らぬは一生の恥なり。
- 七、この地の賑ひは聞きしにまさる思あり。
- 八、善き行ある人には喜多し。
- 九、秀吉は初め松下之綱の僕たりき。
- 一〇、種々の餘興の催もあれば、出席者は多からん。

第三編

第一章 文の主要成分

花美し。

若草生ゆ。

朝日庭を照す。

雨柳に煙る。

われは友に近況を報ず。

右のやうに、二つ以上の単語が集つて、一つの完全な思想を表すものを文といふ。

主語述語

右の文はそれ／＼花若草朝日雨われについて、その状態動

文
主語述語

① 主語 + 述語 = 文
 ② 主 + 客 + 述 = 文
 ③ 主 + 補 + 客 + 述 = 文
 ④ 主 + 補 + 述 = 文

作などを敘述するもので、花若草朝日雨われはいつれもその文の主題である。このやうに、文の主題となる語を主語といふ。
 また、右の文の美し生ゆ照す煙る報ずは、それ／＼その文の主語たる花若草朝日雨われの状態動作などを敘述したものである。このやうに、主語の状態動作を敘述する語を述語といふ。

○文には必ず主語と述語とがある。

客語

朝日庭を照す。

右の文の述語照すは他動詞であつて、庭をはその動作の及ぶ事物を表す語である。このやうに、述語の動作の及ぶ事

補語

補語

物を表す語を客語といふ。

○他動詞を述語とする文には必ず客語を要する。

父は子に家を譲る。

右の文の述語である譲るは他動詞で、家をはその動作の目的を表す客語であるが、別に子にといふ語によつて述語の意味を補はなければ、完全に思想を表すことが出来ぬ。このやうに、述語の意味を補ふ語を補語といふ。
 自動詞を述語とする文も、補語を要することがある。

將軍白馬に乗る。

友都に行く。

形容詞を述語とする文も、補語を要することがある。

か(主格助詞)
か(主語)

主語の構成

海上鏡の如し。
紅葉花より美し。
述語が使役または受身の助動詞を含む場合には、必ず補語を要する。

信長秀吉をして中國を討たしむ。
薄風に吹かる。

右に述べたやうに、文には必ず主語と述語があり、また、その述語の性質によつては、客語と補語を要する。主語・述語・客語・補語の四つを文の主要成分といふ。

第二章 文の主要成分の構成

主語の構成 主語は文の主題となる事物を表すものである

るから、名詞または代名詞から成る。

水流る。
かれ去る。

○主語として用ひられる名詞代名詞は、種々の助詞を伴ふことがある。

春は樂し。

友も來りぬ。

風ばかり吹いてゐる。

○また、用言の連體形が名詞のやうに用ひられ、これに助詞の添はつたものが主語となることがある。

降るは春雨か。

美しきはまごころなり。

述語の構成 述語は主語の表す事物の状態動作などを敍

述語の構成

述するものであるから、主として動詞・形容詞から成る。

風吹く。

月清し。

○述語はまた助動詞を伴ふことがある。

月出てたり。

空霧るべし。

主人は車夫に客を送らす。

北軍は南軍に破られたりき。

○また、助詞を伴ふこともある

空霧れたりや。

水清きか。

汝等努力せよ。

○動詞が重なつて述語となることもある

時は過ぎ行く。

人走り来る。

木の葉舞ひ落つ。

名詞・代名詞も助動詞なりたり。または助詞ぞ・かと結びついて述語を成すことがある。

正成は忠臣なり。

我は我たり。

かれは誰ぞ。

これは何か。

客語の構成 客語は述語である他動詞の動作の及ぶ事物を表すものであるから、名詞または代名詞から成る。

客語の構成

我は登山を好む。

母は我を愛す。

客語は必ず助詞を伴ふ。

○客語は時として助詞を省略することがある。

汝これを見よ。

馬を繋ぐべからず。

○用言の連體形にをを添へたものが客語となることもある。

山は高きを尊しとせず。

汝は足るを知れりや。

補語の構成

補語の構成 補語は述語の意味を補ふ事物を表すものであるから、客語と同じく、名詞または代名詞から成る。

父子に家を譲る。

水東より流る。

雨雪となりぬ。

知事は屬官をして事情を調査せしむ。

補語は必ずにとよりをしてなどの助詞を伴ふ。

○主語客語と同じやうに用言の連體形に助詞の添はつたものが補語となることもある。

道は近きにある。

弱きは強きに扶けらる。

練習

次の文について、その主要成分を示せ。

一、學生文法を學ぶ。

- 二、僕は先生から褒められた。
- 三、病は口より入る。
- 四、僕は三年生になった。
- 五、艱難汝を玉にす。
- 六、卒業生校長より證書を受く。
- 七、父は兄に家業を継がせた。
- 八、校長、村民より感謝状を贈らる。
- 九、死は鴻毛より軽し。
- 一〇、大臣、秘書官をして祝辭を代讀せしむ。

第三章 修飾語及びその構成

櫻の花美しく咲けり。

涼しき風そよ／＼と吹く。

松風妙なる樂を奏づ。

月、鏡の如き湖面に映れり。

右の文の中で、櫻の涼しきは主語、花風に、美しくそよ／＼とは述語、咲けり、吹くに、妙なるは客語、樂をに、鏡の如きは補語、湖面にに、附屬して、それ／＼その意味を修飾してある。このやうに文の主要成分に附屬して、その意義を修飾するものを修飾語といふ。

修飾語の構成 主語・客語・補語(以上體言)につく修飾語は、主として形容詞または形容詞のやうに用ひられるものから成る。

白き帆遠き湖上に浮ぶ。

形・連体

二、用言・連体

三、修飾語(加、助詞)の構成

副詞的(述語)

一、副詞

二、用言助詞

三、體言助詞

形容詞的修飾語

照る月悲しめる人を慰む。

麗かなる朝日晴れたる空に昇る。

君は今逝く春を君が故郷に惜しむらん。

右のやうな修飾語を形容詞的修飾語といふ。

○形容詞的修飾語は主として次の三つから成る。

一、連體形の形容詞・動詞(白き遠き逝くなど)

二、連體形の助動詞の添はつたもの(悲しめる麗かなる晴れたるなど)

三、體言に助詞のがなどの添はつたもの(君がなど)

述語(用言)につく修飾語は、主として副詞または副詞のやうに用ひられるものから成る。

風頗る強し。

月美しく照る。

われは死すとも退かじ。

この意見は實際には行はれざりき。

我等はなほ一層奮發して勉強せん。

右のやうな修飾語を副詞的修飾語といふ。

○副詞的修飾語は主として次の三つから成る。

一、副詞(頗る美しくなほ一層など)

二、用言に助詞の添はつたもの(死すとも奮發してなど)

三、體言に助詞の添はつたもの(實際にはな)

修飾語には、右に述べたものの外、種々の語の集つて成る複雑なものが多い。次にその例を示さう。

山の端を出づる月清く涼しく輝きたり。

副詞的修飾語

富士山は最も雄大にして最も秀麗なる山なり。
 本隊は極めて峻しき山道を進めり。

練習

次の文の中から修飾語を選び出し、そのいづれの語に属するかを述べよ。

- 一、清き川、村の東を流る。
- 二、健全なる精神は健全なる身體に宿る。
- 三、一人の人には必ず一人だけの立場があることを信じよう。
- 四、余は湯槽の縁に仰向に頭を支へて、透き徹る湯の中の軽い身體を、出来るだけ抵抗力のないあたりへ漂はせて見た。
- 五、岸頭に繁れる木々、青き池の面に緑の影を映せり。

六、瓶にさす藤の花ぶさ短ければ、壘の上に届かざりけり。
 七、維盛の率ゐたる平家の軍勢は、富士川にて、水鳥の羽音に驚かされたり。
 八、幼いものの遊戯の世界が自由で廣大なものには、實際驚かされる。
 九、波穏かな瀬戸内海を、僕等の乗つた船は、こるやうに進んで行つた。

第四章 文の主要成分の位置

主語・述語の位置

水 流る。

花 美し。

右のやうに、主語と述語から成る文では、主語は上に、述語は下にあるのが普通である。

客語補語の位置

客語補語の位置

1000 76343. 算
土金木 火 月 日

文の主要成分の倒置

子母を慕ふ。
兄都より歸る。
われは友に近況を報ず。
右のやうに、客語及び補語は、主語と述語の間にあるのが普通である。

○客語と補語を併用する場合には、この兩語には前後一定の順序がない。

學校長は證書を卒業生に授く。
學校長は卒業生に證書を授く。

文の主要成分の倒置 右に述べた主語・述語・客語・補語の位置は、わが國語の自然の順序であるが、時には、文の意味を強めるために、その文の主眼とする主要成分を前に置いて、成

分の位置を換へることがある。これを倒置といふ。

歩^二め我が駒^一。
降^二れるか雨^一は。

大いなるかな孝の徳。

右は主語・述語の倒置の例である。

これ^二を君^一は知^三れりや。

月花^二を誰^一かは^三めでざらん。

雄々しさを人々はほめたへたり。

右は客語の倒置の例である。

都^二より兄^一歸^三り來^四りぬ。

弟^二には父^一これ^三を告^四げざりき。

大空^二に雲^一浮^三かべり。

右は補語の倒置の例である。

練習

次の文の主要成分を通常的位置に置き換へよ。

- 一、麗はしきかな、山河。
- 二、かの話をば、我も聞きたり。
- 三、自愛せよ、國家のためなるぞ、諸君。
- 四、彼の畫きし畫を、余は展覽會にて見たり。
- 五、やよ正行、汝は忘れたるか、父の教訓を。
- 六、静かなる湖の間に、富士は倒にその影を映ぜり。
- 七、歌へや、君も、めでたき歌を。
- 八、をかしいのか、そんなに、これが。

- 九、兄さん、お土産はどうしたの、今朝僕が頼んだ。
- 一〇、惜しかった、アウトか、狙ひはよかつたのに。

第五章 文の主要成分の併置

一つの文の中に、主語・述語・客語・補語がそれ／＼二つ以上用ひられる場合には、多くこれを併置する。

主語の併置

朝夕は涼し。

主人も客もともに笑ふ。

東京及び大阪は東西の二大都市なり。

酒と煙草とは養生に宜しからず。

右は主語を併置した例である。主語を併置するには、主語

M

述語の併置

をそのまゝ重ね用ひ、またはこれを接續詞で連ね、または接續詞の用をなす助詞とて連ねる。

述語の併置

植物は發育し生長し繁殖し枯死す。

人々喜び笑ひ歌ひ踊る。

彼は君子なり聖人なり。

余は終日林中に坐して冥想し空想した。

右は述語を併置した例である。

客語の併置

客語の併置

彼は野球をも庭球をも好くす。

大地震東京及び横濱を襲ふ。

生徒は博物館と商品陳列所とを縦覧したり。

補語の併置

右は客語を併置した例である。

補語の併置

都は柳櫻に彩られたり。

彼は數學及び英語に長ず。

帝都は地震と火事とに襲はれたり。

この兒は知る人にも知らぬ人にも愛せらる。

右は補語を併置した例である。

客語補語を併置する法則は、右の例で見るやうに、主語の場

合と同じである。

第六章 文の主要成分の省略

文の主要成分は、これを省略しても文意を誤らない場合に

主語の省略

は、文を簡潔にし、または語調を強めるために、便宜これを省略することがある。

主語の省略

(われは)昨夜面白き夢を見たり。

(何人も)樹木を折るべからず。

吹く風を(我は)勿來の關と思へども。

會員を(本會は)特別會員と通常會員とに別つ。

○命令を表す文には、主語を省略することが多い。

(汝等)前へ進め。

(汝)行け。

述語の省略

述語の省略

冀はくは、御海容あらんことを、(請ふ)

これはいかに、(あるか)

いざこなたへ、(入り給へ)

さあ、どうぞ、(お通り下さい)

○同じ述語を併置する場合には、最終のもの外は、これを省略することが多い。

友はみな或は東京へ、或は大阪へ、或は外國へ、或は郷里へ別れ行きぬ。

客語の省略

客語の省略

賢人あらば、われは(それを)師とせん。

君のグローブを貸してくれ給へ、僕は生憎(それを)持つてゐない。

補語の省略

補語の省略

先生は英語を(われ等に)教へられたり。
犯人は直ちに(警官に)捕縛せられたり。
兄(家に)歸り来る。

右の外、それ(の)成分に結びつく助動詞・助詞などの省略される場合も随分多い。

勉強は幸福の母(なり)

稲村が崎(は)名將の刀(を)投ぜし古戰場(なり)

練習

次の文の中で、主要成分の省略されてゐるものがあれば、これを入れよ。

- 一、千里の道も一歩より。
- 二、我等は少しも知らざりき。

三、天の原ふりさけ見れば、春日なる三笠の山に出でし月かも。

四、信濃では月と佛とあらが蕎麥。

五、いざ人々とともに君が代の萬々歳を祝せん。

六、出品に手を觸るべからず。

七、君はいづこへ。

八、われは伯父に擊劍を、從兄に英語を習ひたり。

九、鎌倉に行くには、大船驛にて汽車を乗換ふ。

一〇、道に行くには左側を通れ。

第七章 節

カ 月 日

霜白し。

夜更けたり。

右はいづれも一つの文である。さて、この二つの文を併置

して、

霜白く、夜更けたり。

とすれば、また一つの文となる。この場合、

霜白く。

夜更けたり。

のやうに、文がその獨立を失つて、大きな文の一部となつて、
ものを節といふ。

主語節

主語節

花の美しきは櫻なり。

歲月の流るゝは早し。

右のやうに、主語の地位にある節を主語節といふ。

述語節

述語節

It is a cherry tree that a beautiful flower

客語節

客語節

今日は余の生れたる日なり。

上野公園は櫻花爛漫たり。

右のやうに、述語の地位にある節を述語節といふ。

庭の櫻は春の來るを待ち顔なり。

父は子の學校を卒業せしを喜べり。

右のやうに、客語の地位にある節を客語節といふ。

補語節

補語節

紅葉花の盛りなるに似たり。

右のやうに、補語の地位にある節を補語節といふ。

修飾語節

修飾語節

水清き都は京都なり。

it full bloom cherry tree at weibo park

對立節

風涼しき朝花咲きたる庭を逍遙す。
右のやうに、修飾語の地位にある節を修飾語節といふ。

對立節

雲は山をめぐり、霧は谷をとざす。

月落ち、鳥啼き、霜天に滿つ。

右のやうに、對立的に結びつく節を對立節といふ。

練習

次の文の中にある節について説明せよ。

- 一、電車のごむには閉口したり。
- 二、學生はみな別を惜しみたれど、先生は遂に行かれたり。
- 三、柳散り、水涸れ、石ところど。

單文

單文

花咲く。

第八章 文の構成上の分類

文は、その構成によつて、單文・複文・重文の三つに分ける。

- 四、旅館の燈かすかにして、鶏鳴曉をもよほす。
- 五、子曰く、剛毅朴訥は仁に近しと。
- 六、月明かに、星稀に、鳥鵲南に飛ぶ。
- 七、君は僕が呼んだのを知つてゐたか。
- 八、僕の誕生日は君が生れたのと同日だ。
- 九、幹事は準備が出来たと満場に報告した。
- 一〇、苦は樂の種とはこのことだ。

複文

國いよく榮ゆ。
 學生試験を受く。
 父は家を子に譲る。
 山も野も緑に彩られたり。
 われはかつ驚き、かつ悲しみ、かつ歎じたり。
 右のやうに、主語と述語が単一に關係する文を單文といふ。
 單文には、主語述語だけのもの、客語補語などを含むもの、または、二つ以上の同じ成分を有するものなどがあるが、主語と述語の關係は凡べて單一であつて、節を含まない。

複文

花の散るは潔し。
 山は楓樹紅に燃ゆるが如し。

重文

母はわれの健かならざるを憂ふ。
 落花雪の亂るゝに似たり。
 春は島山霞に包まれて眠るが如し。
 右のやうに、對立節以外の節を含む文を複文といふ。複文の含む節は文の中にあつて一つの成分の働をする。

重文

春去り、夏來る。
 人生は短く、藝術は長し。
 夜は全く明けはなれ、太陽は昇りに昇る。
 風號び、海怒りて、波浪山の如し。
 右のやうに、二つ以上の對立節から成る文を重文といふ。
 このやうに、文はその構成によつて、單文、複文、重文の三つに

類別されるが、時としては、これらが互に混合して、複雑な形になることがある。

歴史は長き七百年興亡すべて夢に似て、英雄の墓苔むしぬ。(複文を含む複文)

山は裂け海はあせなん世なりとも、君にふたごころわがあらめやも。(重文を含む複文)

松青く砂白き海岸は長く連り、峯高く雲低き山は遠く走れり。(重文を含む複文の對立せる重文。)

練習

次の文を構成上から類別せよ。

一、柳は緑に、花は紅なり。

Handwritten notes and diagrams for the exercise. Includes a tree diagram for the first sentence: 柳 (green) and 花 (red) are connected to a central point. Other notes include '山は裂け海はあせなん世なりとも' and '我は君に二入ありめやも'.

セ

二、精神一到何事か成らざらん。

三、村の子供等は小川のほとりにて魚を漁れり。

四、出て行く船の人も、見送る棧橋の人も、みな手巾を打振りぬ。

五、さゝなみや志賀の都は荒れにしを、昔ながらの山櫻かな。

六、身はかの雲と軽く、心はこの水と淡し。

七、庭を東へ行き盡すと南上りに聊かばかりの菜園があつて、真中に栗の木が一本立つてゐる。

八、藝術家とは、如何なる問題若しくは仕事に對しても、自己内部の本然的な力を以て當つて行く人で、その力の働の中に自己の表現を求め

る人である。

九、一茶の感じた自然は、普通の人の持つやうな退屈なものではなくて、

子供の感ずる自然のやうな直接なところがある。

Extensive handwritten notes and diagrams for the text on the left page. Includes a tree diagram for the eighth item, showing '藝術家' branching into '如何なる問題' and '仕事に對しても', which further branches into '自己内部の本然的な力' and '自己の表現を求め'.

一〇、智に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ
兎角に人の世は住みにくい。 此立出即り命あり

日本文法教本 卷下 終

附 録

文法上許容スベキ事項 (明治三十八年十二月二日 文部省告示第五十八號)

- 一、「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ。
- 二、「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。
- 三、過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ。

例

火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ。

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ、金利ノ引弛ヲ見ザリシ。

四、「コトナリ」異ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ。

五、「セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例

文法上許容スベキ事項

手習サス。

周旋サス。

賣買サス。

六、「セラル」トイフベキ場合ニ、「サル」ト用キル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨

ナシ。

例

罪サル。

評サル。

解釋サル。

七、「得シム」トイフベキ場合ニ、「得セシム」ト用キルモ妨ナシ。

例

最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク、各其地位ニ安ズルコトヲ得セシムベシ。

八、佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シシカ」ニ連ネテ「暮シシ時」過シシカバ「ナドイフ

ベキ場合ヲ「暮セシ時」過セシカバ「ナドトスルモ妨ナシ。

例

唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻撃開始ヨリ陥落マデ、僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

九、てにをはノ「ハ」動詞助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

例

花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

一〇、疑ノてにをはノ「ヤ」ハ、動詞形容詞助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

例

有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

一、てにをは「トモ」ノ動詞、使役ノ助動詞、及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例 數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラル、トモ。

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

二、てにをは「ト」ノ動詞、使役ノ助動詞、受身ノ助動詞、及時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例

月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラル、ト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。

萬人皆其徳ヲ稱ヘケルトゾ。

三、語句ヲ列舉スル場合ニ用キルてにをは「トハ」誤解ヲ生ゼザルトキニ限り、最終

ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例

月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例。

史記ト漢書①ノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳②ヲ讀ムベシ。

一四、上ニ疑ノ語アルトキニ、下ニ疑ノてにをは「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例

誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

助動詞相互の連続表

たし	らる	る	しむ	さす	す	り	たり	つ	ぬ	む	けり	き	まじ	めり	べし	ず	たり*	なり	上 下
たからす	られす	れす	しめす	させす	せす	〔らす〕	〔たラス〕	—	—	—	—	—	—	—	〔べからす〕	—	たラス	ならす	ず
たからじ	られじ	れじ	しめじ	させじ	せじ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	たらじ	ならじ	じ
たからむ	られむ	れむ	しめむ	させむ	せむ	〔らむ〕	たらむ	てむ	なむ	—	—	—	—	—	〔べからむ〕	〔ざらむ〕	たらむ	ならむ	む
—	られさす	れさす	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	さす
—	られしむ	れしむ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〔べからしむ〕	〔ざらしむ〕	たらしむ	ならしむ	しむ
—	—	—	しめらる	させらる	せらる	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	らる
〔たかりき〕	られき	れき	しめき	させき	せき	りき	たりき	てき	にき	—	〔けりき〕	—	—	〔ありき〕	〔べかりき〕	〔ざりき〕	たりき	なりき	き
〔たかりけり〕	られけり	れけり	しめけり	させけり	せけり	〔りけり〕	たりけり	てけり	にけり	—	—	—	〔まじかりけり〕	〔ありけり〕	〔べかりけり〕	〔ざりけり〕	たりけり	なりけり	けり
—	られぬ	れぬ	しめぬ	させぬ	せぬ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〔べかりぬ〕	—	—	—	ぬ
〔たかりつ〕	られつ	れつ	しめつ	させつ	せつ	りつ	〔たりつ〕	—	—	—	〔けりつ〕	—	—	〔ありつ〕	〔べかりつ〕	〔ざりつ〕	〔たりつ〕	〔なりつ〕	つ
—	られたり	れたり	しめたり	させたり	せたり	—	—	—	にたり	—	—	—	—	—	—	—	—	—	たり
〔たからけり〕	られ	れ	しめ	させ	せ	〔り〕	〔たり〕	〔て〕	に	—	—	—	〔まじか〕	—	〔べから〕	〔ざり〕	〔たり〕	〔なり〕	けり

〔 〕 現今多く用ひないもの
 () 動詞ありと融合したものの連続
 連體形に續くものを便宜によつて繰入れたもの
 * 肯定の助動詞

例
 イハユル
 顔回ナル

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



大正元年八月七日印
 大正八年十二月二十四日修正再版印刷
 大正十三年九月二十一日修正四版印刷
 大正元年八月三十日發行
 大正八年十二月二十七日修正再版發行
 大正十三年九月二十五日修正四版發行

日本文法教本	十冊裝	時定價
卷上	拾參錢	七拾七錢
卷下	貳拾八錢	五拾錢

昭和二年度臨時定價
 金四拾八錢

大正十一年度臨時定價
 金四拾八錢

著者 金澤庄三郎
 發行所 株式會社東京開成館
 代表者 渡邊良助
 印刷者 佐々木俊一
 發行所 株式會社東京開成館
 振替貯金口座東京第五三三三番
 大阪市東區北久寶寺町心齋橋筋角
 三木佐助
 東京市日本橋區數寄屋町九番地
 林平次郎

(刷印社會式株刷印士富)

白河中学校
牙四学号本
一
B
真



広島大学図書
2000022314

